



〈未来をひらくか？ 新・ニューファミリー〉

ジャーナリスト
松本侑壬子

私の幼友達S子はもう半世紀もフランスに住んでいる。留学先の同級生と結婚して、子も孫もいて、今では国籍もフランス人だ。その妹はドイツ人と結婚してドイツ暮らし。二人の娘はスペインと米国在住だ。ずいぶん国際的な家族と思えるが、フランスではそんなものではないらしい。何しろ、異人種間結婚が世界一で、ある統計では全体の二〇%近くに上るといふ。

本作は、そんなフランスの、ある中流家庭の娘たち全員が異人種外国人と結婚したために巻き起こる、切実にして時にはコミカルな家族内騒動の行方を軽やかに描く。移民、宗教、生活習慣、偏見や格差…と数え上げれば問題山積の中で、何が起こりどう切り抜けたのか、その顛末を丁寧に追いながら、グローバル社会に生きる新しい家族のあり方を描いている。

家族は、ロワール地方の城(のよう

な豪邸)に住むヴェルヌイユ夫妻と四人の娘たち。長女はアラブ人と、次女はユダヤ人と結婚。そして今日は三女の結婚式。

記念写真で写真屋さんに「しかめっ面」を注意されるほど、父親クロードと母親マリリーには心中穏やかならぬものがあつた。だつて新郎シャオは、まともや異国の中国人なのだ。外国人差別なんかしないけれど、親としては愛する娘が異教徒と市役所で挙式したのが情けない。敬虔なカトリック信者である親としては、一人くらい結婚式を立派な教会で挙げてもらいたかつた。

娘たちの新家庭には、両親には馴染みのない生活習慣が次々と。次女の息子のユダヤ教の割礼式に出たり、クリスマスにマリリーは婚らの食文化に合った別々の肉料理を用意したりして気を遣う。婿同士でもちよつとした冗談のつもりが、異文化ギャップから大騒動

を引き起こす。「あるある」とそれぞれの人種の癖や特徴がリアルで思わずニヤリとしてしまう。だが、クロード夫妻はもうくたくただ。最後に残つた末娘ロールには自分らと同じカトリック教徒の婿を、と無駄な画策をする。

ついに、ロールがカトリック教徒の恋人を連れて来た。だが、ハンサムなその青年はコートジボアール出身の黒人俳優だった。しかも、アフリカの故郷にはフランスの植民地時代を根に持つ超難物の父親がいて「フランス人に搾取のつけを払わせろ」などという…。

このユニーク極まる物語は、ショーヴロン監督が前述の異人種間結婚に関する統計資料を読んだことから発想したという。伝統的なフランス系家庭の出身である監督自身、アフリカ系女性との結婚の経験があり、それらを基に想像を膨らませていき、脚本を書き上げた。フランスは一九世紀以来多くの移民、難民を受け入れ、国籍を取つた者も入れると移民の数は欧州最大だといふ。それだけに、多文化主義の衝突など厳しい現実もある。だが、互いの違いを認め合い楽しめれば、人生はどんなに楽しくなるだろう―笑いの中に監督の思いが伝わってくる。日本でも決して他人事ではない。



『最高の花婿』

フランス映画 (97分)

監督: フィリップ・ドゥ・ショーヴロン

出演: クリスチャン・クラヴィエ、シャンタル・ロビー、フレデリック・ベルほか

公開中

© 2013 LES FILMS DU 24-TF1 DROITS AUDIOVISUELS-TF1 FILMS PRODUCTION